Cut And Paste

カット&ペーストでこの世界を生きていく

2

咲夜
イラスト
PiNe

「試し読み版」

ツギクルブックス

主な登場人物

フェンリル
体長３ｍのメスの神獣。マインのことを気に入っている。
クロード・ロゼリア
ロゼリア家の次期当主。自分勝手でわがままな性格が特徴。
アイシャ・ローレル
元B級冒険者で、「聖弓のアイシャ」の二つ名を持つ実力者。
シルフィード・オーガスタ
オーガスタ王国の第一王女。常に冷静さを保っている美少女。「姫騎士」の二つ名を持つ。
マイン
幼いころに両親を亡くした、心の優しい少年。神様から特別なスキルを授かる。
わっふる
フェンリルの子供。好奇心旺盛で、人の頭の上に登るクセがある。

アルト・オーガスタ
オーガスタ王国の第一王子。脳筋タイプで、情に厚い。
ファーレン・オーガスタ
オーガスタ王国の国王。元は平民だったが、強力なスキルの組み合わせによって国王にまでのぼりつめた。
ガーネット・オーガスタ
オーガスタ王国の王妃。長い黒髪が特徴で、多くの謎を秘めている。
ルイス・オーガスタ
オーガスタ王国の第二王子。格闘技術よりも頭脳で勝負するタイプ。
エアリアル・オーガスタ
オーガスタ王国の第二王女。愛称はエアリー。体が弱く、あまり城外に出られない。

1章　初めての迷宮攻略

「じゃあ入ろうか」

僕とアイシャは、迷宮都市アドルにある〝力のダンジョン〟の地下1階にいた。

フロアボス部屋に入って、ボスのステータスをすぐに確認する。

名前：コカ・グリース　LV：42　種族：鳥族　性別：なし
【スキル】突進
【アビリティ】フライングフェザー　石化（ペトリファクション）

げっ、レアボスだ。石化なんて物騒なアビリティがあるぞ……。取りあえず【カット】しておこう。でないと怖くて近寄れないしね。

「……マイン君、あれレアボスよ……さすがにきつくないかしら？」

アイシャが心配そうに尋ねてくる。

「大丈夫だよ。コカ・グリースってコカトリス系の魔物だよね？　なら石化攻撃がありそうだ

から、遠距離攻撃主体で倒そうよ」
そう言って僕は【魔術の極みＬＶ２】を発動する。
「じゃあ、いくよ」
いきなり【魔法・火】を連発する。【魔法・火】を選んだのは、なんとなくあの羽がよく燃えそうな気がしたからだ。
しばらくの間、轟音が鳴り響いた。攻撃をやめた後に残っていたのは、全身が焼け焦げて、フラフラとよろめくコカ・グリースの姿だった。
僕は止(とど)めを刺すべく【豪腕・極ＬＶ２】【身体強化・大ＬＶ２】【腕力強化・極ＬＶ２】を使い、一気に間合いを詰めていく。
そしてコカ・グリースの首元に狙いを定め、ライトニングエッジを一閃。スキルによって強化されたその一撃は、呆気なくコカ・グリースの首を跳ね飛ばした。
「……マイン君、やり過ぎだよ……」
アイシャの呟きがボス部屋に響き渡った。

◆◇◆◇◆

ボス部屋に入る前日――。
「ふう、やっと着いたね！」
馬車に揺れること、約10時間。ようやくダンジョンに隣接した町、アドルに到着した。
僕とアイシャは、〝始まりの短剣〟を成長させる素材であるトロールを狩るため、ダンジョンにやって来たのだ。
馬車から降りて大きく伸びをする。アイシャもかなり疲れた様子で、同じように大きく伸びをしていた。
「こんな時間だし、ダンジョンに入るのは明日にして、今日はこの町に泊まろうか」
「そうだね。長い間、馬車に揺られて疲れているし……それでいいんじゃないかしら？」
アイシャの了解を取りつけて、まずは宿屋を探すことにする。
お金も余裕があるし、ちょっといい宿に泊まろうかな。今までの生活では、高級宿など夢のまた夢だった。というか考えたことすらないよ。なにせ日々食べていくだけで精一杯だったからね。だから、高級宿……すごく興味があるんです。
僕一人で決めちゃうわけにいかないし、ちょっと聞いてみよう。
「お金も余裕があるし、ちょっといい宿に泊まってみない？」
アイシャはしばらく考えた後「ま、いっか」と了承してくれ、この町で2番目に高い宿に部

屋をとることになった。「1番じゃないの？」って聞いたら「ちょっといい宿だよね」と言われてしまい、断念。

そりゃ、これから一緒に生活していくんだもんな。贅沢は敵ということだろうね。

ちなみに1番高い宿は1人1泊2食付きで金貨3枚。僕らが泊まる宿は1人金貨1枚と銀貨5枚だ。一般的な冒険者が使う宿は、銀貨3～5枚前後が普通みたい。そう考えると、2番目とはいえ、ちょっといい宿というレベルではない。アイシャはだいぶ奮発してくれたと思う。改めてアイシャに感謝。

宿に足を踏み入れると、女将さんらしき人がすぐに駆け寄ってきた。

「いらっしゃいませ。銀の鈴亭にようこそ。1部屋ということでよろしいでしょうか？」

仕方ないけど、女将さんは僕でなく、アイシャに話しかけてきた。アイシャも若干顔をしかめながらも、それを女将さんに感じさせないように笑顔を見せる。

成人したての僕よりも、当然アイシャの方が代表者に見えるわけで……。今まではこんなこと気にならなかった。けど、今は……少しだけ悔しい。

「あなた、それでいいかしら？」

……え？　彼女のいつもの話し方ではない。

ああ、そうか。きっと僕の気持ちに気付いたんだろう。あるいは彼女自身が気に入らなかったのかもしれない。ならば、僕は（ちょっと早いけど）彼女の伴侶として頑張ろう。

「はい。1部屋で構いません」

さすがは高級宿の女将さん、僕らの関係を今の会話で理解したんだろう。すぐに僕に向き直り、「ご宿泊ありがとうございます」と言いながら軽く頭を下げた。

……ささやかな、本当にささやかな出来事だったけど、僕はちょっとだけ成長できた気がするんだ。そして同時に、アイシャの優しさに何度目か分からない感謝をした。

1部屋ずつ取るつもりだったが、先ほどのやり取りのおかげで、2人で1部屋になってしまった。……これは大誤算だった。

アイシャも心なしか顔が赤いような気がする。

「と、取りあえず、町を散策してみない？　何か掘り出し物があるかもしれないしね」

「そ、そ、そうよね！　行きましょう！」

とにかく今は、客室という閉鎖空間の中で2人きりでいるのが非常に気まずい。自宅で2人きりになるのとは訳が違う。実際に散策はしたかったのだけど、この際、口実にさせてもらおう。僕たちは夕暮れのアドルの町へと飛び出していった。

僕たちが最初に向かったのは、雑貨屋さんだ。アイシャとシルフィが一緒に暮らすことになり、いろいろな小物が足りないことが分かったんだ。もちろんルーカスにも雑貨屋さんはあるけど、欲しい物がなく、道中の馬車の中でアドルに着いたら探してみようと話していたのだ。

迷宮の町というだけあって、雑貨屋の品揃えも実用的な物が多く、いくつかいい物を買うことができた。楽しく買い物ができたこともあって、宿での気まずい雰囲気はいつの間にかすっかり消えていた。

「流石に迷宮都市というだけあって、人がすごいわね」

「うん。……これだと、王都よりも多いんじゃないかな？」

あとで分かったことだけど、夕方のこの時間帯はちょうど迷宮から出てきた冒険者たちで混雑する時間なのだそうだ。常時この混雑状態だと、生活するには辛過ぎるよね。

これだけ混雑するとはぐれてしまう可能性がある。僕は……躊躇（ためら）いがちにアイシャの手を掴む。

「は、はぐれちゃうといけないから……」

僕がボソボソと言い訳っぽく話すと、アイシャは一瞬驚いた表情を見せたが、ギュッと手を握り返してくれた。頬が少しだけ赤くなっているのは、夕日のせいだけではないと思う。

次に向かったのは武器屋さん。
ダンジョンに隣接している町だけに、いい武器や防具があると思うんだよね。僕はこの前買ったばかりだから冷やかしだけど、アイシャにはいい機会かもしれないよね。
手を繋ぎながら店の中を見回っていると、冒険者らしき人たちからジロジロと見られる。そりゃ、アイシャのような美人さんと手なんか繋いで歩いていたら、嫉妬されるのもしょうがないかな。あまりにもジロジロ見られるので、今は繋ぐのをやめている。
そんな中、売っている武器の中に非常に気になる物を発見した。
色が真っ黒の短剣と弓、片手剣だ。3つとも処分品の中に無造作に置いてある。つまり、人気がない売れ残り品ってことなんだろう。
アイシャも僕が見ている黒い武器に気が付いたようだ。
「マイン君、あの短剣って……マイン君の持っているのと同じだよね？」
そう、アイシャの言う通りだ。あれは、成長する武器、〝始まりの短剣〟だ。

名前：始まりの短剣　攻撃：＋9　階級：無級　属性：成長　特攻：なし
必要素材：トロールのなめし革×10、アイアンインゴット×20、上級魔石

うん、間違いない。僕が持ってるヤツと一緒だ。攻撃の数字が若干低いけど、一緒と思って間違いない。

ということは、一緒に置いてある黒い弓と黒い片手剣もひょっとすると……。

名前：始まりの片手剣　攻撃：＋13　階級：無級　属性：成長　特攻：なし
必要素材：マンティコアのなめし革×5、アイアンインゴット×30、上級魔石

名前：始まりの弓　攻撃：＋10　階級：無級　属性：成長　特攻：なし
必要素材：マンティコアのなめし革×3、エルダートレント材×10、上級魔石×2

やっぱりそうだ！　短剣以外にもあったんだ！

確か、シルフィは【片手剣・極】を持っていたはずだし、アイシャに至っては【弓術・聖】を持っている。どれくらい強い武器になるのか分からないけど、持っておいて損はないはずだ！

「すみません！　この2つをください！」

「毎度ありっ！」
「これ、他の種類はないんですか？」
「たまにダンジョンで取れるみたいでね。ちょくちょく売りにくるぜ。まあそんなに強い武器じゃないから、入荷したらすぐ処分品行きなんだけどな。それでも色が珍しいからって趣味で買ってくヤツがいるけどな」
２つで銀貨５枚だった。うん、安い。見かけたら、他の武器も買っておいてもいいかもしれない。
アイシャは、何でこんなの買ったんだろうと不思議そうな顔をしている。まあ、そりゃそうだよね。僕は笑いながらごまかして、買ったばかりの弓と片手剣を収納袋に放り込む。
他には今買いたいと思う物はなかったので、店員さんにお礼を言ってお店を出た。
「結構暗くなってきたね。そろそろ宿に戻ろうか？　ご飯の時間もあるから食べ損ねちゃうともったいないしね」
宿への道すがら、少し変わった屋台料理などに誘惑されつつもなんとか宿に戻り、晩ご飯にありつくことができた。さすがに高級宿だけあって、手の込んだ料理が多く、僕もアイシャも大満足だ。高い宿代は伊達じゃないってことだね！
美味しい食事を終え、部屋に戻る途中でアイシャが僕を呼んだ。

「見て見て、マイン君！　お風呂、お風呂があるわよ‼」
お風呂？　ああ、貴族とか王族とかが使っている身体を洗う設備か。へえ、やっぱり高級宿ってすごいんだね。きっと、そういう偉い人たちもこの宿には泊まったりするんだろう。
「これ、どうやって使うの？」
「これはね、この大きな箱の中に温かいお湯を入れて、その中に裸になって入るのよ」
なるほど、僕らが川で水を浴びたり、濡れタオルで身体を拭くようなものか。
「アイシャは使ったことあるの？」
「ええ、ギルドの寮にはあったのよ。すごく気持ちいいのよ。出たあともさっぱりするしね」
なるほど。じゃあ今は不便をかけてしまっているっていうことだね。申し訳ないなあ……。
早速、お風呂の使い方をアイシャに聞いて入ってみることにした。
「ふぅ～、確かに、コレは気持ちいい～♪」
アイシャが気持ちいいと言うわけだ。湯に疲れが溶け出していく気がする。多分……というか絶対にシルフィも普段からお風呂に入っているよね。オーク・キングとオーク・ジェネラルも売れてるはずだし、いっそ家にも造ってもらおうかなあ。一体、いくらくらいするんだろ、コレ。
お風呂の気持ちよさを体験し、上機嫌でお風呂を出た僕は、先に入らせてもらったことをア

イシャにお礼を言ってベッドに寝転がる。すっかりご機嫌な様子の僕を見て、アイシャがクスクス笑っていたが気にしない。

そのままベッドで寝転んでいるうちに時間が経ち、アイシャも風呂から上がってきた。お風呂上がりのアイシャはほんのりと上気しており、とても綺麗だった。その姿を見て、宿屋で２人きりという事実を急に思い出し、僕の頬も真っ赤に染まっていく。アイシャも同じように頬を真っ赤に染めており、どうも考えていることは同じようだ。

シルフィが帰ってきて結婚式を挙げてから、そうずっと思っていたけど……湯上がりのアイシャはとても魅力的で、我慢できそうにない。

「……アイシャ、いい？」

僕が緊張でかすれた声で聞くと、彼女は静かに首を縦に振って僕の隣にやってきた。アイシャをそっと抱きしめると……すごくいい香りがする。

そして僕らは同じベッドの上で、一夜を過ごすことになったんだ。

◆◇◆◇◆

翌朝目覚めると、……知らない天井だった。

それもそのはずだよ。ここは迷宮都市アドルにある高級宿屋〝銀の鈴亭〟の一室だ。
そして僕の寝ている隣には、生まれたままの姿で美女が眠っている。言わずと知れた僕の婚約者の一人、アイシャだ。いろいろと目のやり場に困ります。夕べ、散々隅々まで見たわけだけど、やはり困るものは困るわけで……。
取りあえず、身体がベタベタするのでもう一度お風呂に入ってこよう。すっかりお風呂の魅力にとりつかれてしまったよ。
「～♪」
お風呂に入ってリラックスし、上機嫌で鼻歌を歌っていると、扉の向こうからアイシャの声が聞こえてくる。
「マイン君、お風呂に入ってるの？」
うん、そうだよと声を返すと、なんとアイシャがお風呂の中に入ってきた⁉　しかも……いや、お風呂だから当たり前だけど、一糸まとわぬ生まれたままの姿で！
少し恥ずかしそうにしているが、しっかりした足取りで湯船に近づいてくる。そして、掛け湯をして僕に軽く微笑みを向けた。
「時間がもったいないから来ちゃった。背中流してあげるね」
そりゃ昨日お互いの身体はしっかりと見てるし、もっとすごいことをしてるわけだから、一

緒に入るのは吝(やぶさ)かでないというか、そりゃ嬉しいわけだけど……。なんか大胆過ぎませんかね、アイシャさん？

宿屋の朝ご飯を食べ終わり、僕たちは一路目的のダンジョンへと向かう。

ダンジョンの入り口まで辿(たど)り着くと、受付をしている騎士の人に聞いてみた。

「こんにちは！　中に入りたいのですが、いいでしょうか？」

受付の騎士さんは、紙を出して「これに名前と定宿を書くように」と指示をする。この紙は、ダンジョンから出た時にも記入するらしい。ダンジョン内で事故があって帰って来れなくなった人が出た場合、この紙によって誰が中にいるのかを確認してるんだって！

僕とアイシャが書き込んだ紙を渡すと、代わりに金属のプレートを渡された。このプレートとさっき書いた紙が対になっている。

所定の手続きを終え、内部の簡単な情報を聞いたあと、僕たちはいよいよダンジョンへの挑戦を開始する。

「へえ、ダンジョンっていうくらいだから、もっと薄暗いと思ってたけど違うんだね」

中に足を踏み入れて最初に受けた印象だ。松明(たいまつ)のような物が必要かなと思っていたけど、アイシャが用意しようとしなかったから不思議だったんだよね。壁自体から蛍の光のような微妙

な淡い明かりが浮き出ている。そのおかげで迷宮内自体が結構明るいのだ。
「他のダンジョンだと、明かりが必要になったりする場合もあるのよ」
なるほど。場所によって中の様子や雰囲気もきっと変わるんだろうね。ダンジョン……奥が深いなあ。
アイシャ先生のダンジョン講座を聞きながら進んでいくと、魔物が固まっているのを見つけた。

名前：パワー・スライム　ＬＶ：６　種族：スライム族　性別：なし
【スキル】常時：パワー
【アビリティ】なし

名前：パワー・ヒートスライム　ＬＶ：７　種族：スライム族　性別：なし
【スキル】常時：熱
【アビリティ】なし

この前、ギルドの依頼で倒したスライムより若干レベルが高いな。これもダンジョンだからだろうか。スキルについては、よく分からないものがあるのに気付いた。

〝常時〟は言葉のままだから分かるが、〝パワー〟って何だ？　〝熱〟もよく分からないぞ。

「熱いっ！」っていうあの熱のことなの⁉

取りあえず、切り取ってみるか。パワーを取って貼り付けてみたけど、よく分かんないな。常時ってついているからには、何もしなくても効果はあるんだろうけど……。

う～ん、分かんない時はやはり鑑定だな。

【常時：パワー】：ほんのり強くなる。

〝ほんのり強く〟って何だよ！　スキルのくせに僕に突っ込みさせたよ！

なんとなく熱も予想がつくけど……一応、調べてみる？

【常時：熱】：ほんのり熱くなる。

……予想通りだ。さすがにコレはいらないよなあ。

あ、待てよ!? 閃いちゃったぞ、僕。
【常時：熱】を切り取って、地面に転がっている小石に貼り付けてみた。その小石を手にすると、確かに熱さを感じる。ちょっと熱めのお湯みたいだ。
さらに実験。別のパワー・ヒートスライムから【常時：熱】を切り取って、同じ小石に貼り付ける。
「熱っ!?」
僕がいきなり叫んだのを見て、アイシャが不思議そうにこちらを見る。
「だ、大丈夫だよ、何でもないよ」
アイシャが火傷するといけないので、今の小石から【常時：熱】を1つ切り取って別の小石に貼り付けておく。
「あら、この石……妙に熱いわね」
「……だよね、ちょっとびっくりしちゃって」
取りあえず、常時発動のスキルは何かに使えるかもしれない。今のうちに全部、小石に貼り付けて収納袋に入れておこう。
「じゃあ、スライムやっちゃおうか」
そう言いながら、地面に落ちている普通の小石を数個手にとって、スライムに向けて全力で

投げつけた。鋭い風切り音と共に猛烈な勢いで飛んでいき、そのままスライムに直撃する。
スライムの軟体を持ってしても、その衝撃を吸収することができず、そのまま呆気なく絶命する。たとえ小石であっても、レベル61の僕が投げつければ、当然といえば当然の結果だろう。
アイシャは……驚いた表情で絶命したスライムを見つめている。まあ、そりゃそうだよね。石とはいえ、大きさも重さもそれほどでもない小石だもん。それが風切り音を発しながら飛んでいき、スライムとはいえ一撃で倒しちゃうのだから。
驚いているアイシャを横目で見ながら、どんどん小石を投げていく。【指弾】を使ってもよかったんだけど、スキルは極力使わないつもりでいる。
残った4匹のスライムも、同様に一撃で倒していく。倒したスライムからスライムオイルが7個もドロップした。これ、たぶん【プロバビリティー】の効果だよね。
「マイン君、やっぱりすごいわね。ひょっとして私の弓は必要ないかしら……」
「ううん、そんなことないよ！　だってスライムだもの。下の階に行けば強いのが出てくるのだよね？」
「まあ、そうなんだけどね……」
アイシャを宥(なだ)めながら、僕たちは順調にダンジョンの奥へ奥へと進んでいく。
1階に現れる魔物はどうもスライムばかりのようで、最初に倒したパワー・スライムとパワ

ー・ヒートスライムの他にはこんなヤツらがいた。

・パワー・ブルースライム（スキルは〝水〟）
・パワー・グリーンスライム（〝風〟）
・パワー・ホワイトスライム（〝光〟）

所持していたこれらのスキルは予想通り、全て常時型だった。

〝水〟はほんのり水が出る
〝風〟はほんのり風が吹く
〝光〟はほんのり明るくなる

これらをペーストした小石が各20個ほど収納袋に溜まった。
スライムをぷちぷちと倒しながら考えた結果、これらを使って魔導具が作れるんじゃないかと思い始めた。今、試してみようと思っているのはお風呂だ。
〝水〟を重ねて風呂桶に水を溜めて、〝熱〟を重ねてお湯を沸かす。これで自動的にお風呂に

お湯を溜められるんじゃないかと思うんだよね。実際の導入については、大工さんに相談しないとダメだけど……。

これが成功すれば、他にもいろいろな使い道があると思うんだ。帰宅したら、早速研究が必要だね！

スライムの不思議さについて考えながら歩いていると、大きな扉が目の前に現れた。

「マイン君、1階のボスの部屋に着いたみたいよ」

「ボスってやっぱり強いのかな？」

「う～ん、1階だからそれほどじゃないと思うけど、出てくるのは多分スライム系だと思うわ」

どうも各階のボスは、その階層にいる魔物の上位種が現れる傾向があるんだって。

ただ、稀にレアボスってヤツが登場することもあるらしい。滅多に出会うことはないと思うんだけど、一度くらい見てみたいよね。

「じゃあ、頑張ろうか！」

「やっと私の出番がありそうよね」

ああ、アイシャが少し拗ねてるっぽい。けど1階の敵は弱いし、そもそもスライムだからアイシャの出番はなくなっちゃうんだよね。スライムの場合、矢のコストと見合わないしね。

アイシャの機嫌を直す方法を考えながら、ボス部屋の扉を開けて中に入っていく。
中にいた魔物は……でっかいスライムだ。

名前：エクスシア・スライム　ＬＶ：12　種族：スライム族　性別：なし
【スキル】なし
【アビリティ】軟体監獄（モルスク・プリズン）

なんか訳の分からないアビリティを持ってるな。ボスなのにスキルはないんだね。取りあえず、アビリティを調べてみようとすると、
「マイン君、行くね！」
……え？　うわっ、僕がアビリティを調べる前にアイシャが戦い始めちゃったよ。今まで戦えなかったことで、ストレスを相当に溜め込んでいたんだね。ごめんね、アイシャ。
アイシャが放った矢は、オークの集落で僕を助けてくれた時と同じように三条の軌跡となってボススライムへと飛んでいく。取りあえず、アビリティの確認は後回しでいいや。アビリティを先に奪って弱体化させておこう。
今まで不要なスキルやアビリティは捨ててきたけど、せっかくだから小石に貼り付けて取っ

ておこうかな。小石なら邪魔にならないしね。

僕が裏でそんなことをやっている間も、アイシャは攻撃の手を全く緩めない。【弓術・聖】は上から2番目のスキルだけあって、一撃がとんでもない威力だ。ハイオークを退けたくらいだもん、そりゃあ強いはずだよ。

それから数分後、アビリティがなくなって弱体化していたとはいえ、全く危なげなくアイシャはエクスシア・スライムを倒した。

「お疲れ様っ！　今度は僕の出番がなかったよ」

笑いながらアイシャに声をかけると、うふふと上機嫌で笑みを浮かべる。どうやら、だいぶストレスを発散できたようだ。うん、よかったよかった。

そういえば、アイシャの戦いを見てて思ったんだけど、パワー・スライムたちから奪ったスキルのような常時発動型を鏃（やじり）に貼り付けてみてもいいかもしれないね。

例えば〝熱〟を沢山重ねて攻撃するとか、かなり効果があるんじゃないかな？　いわゆる属性矢って感じかな。これも要研究だね。

さて、エクスシア・スライムのドロップ品を見にいこう。

【エクスシアオイル】：皮膚に塗布すると高い保湿効果が得られる。

まずはお約束のオイルだけど……イマイチ分かんないや。
で、もう一つは装備品っぽいのがドロップした。

名前：エクスシアケープ　防御：＋５　階級：上級　属性：なし
特性：時々、物理攻撃を１～２％軽減することがある。

う～ん、これまたボスの割には微妙な……。気休め程度には使えるかな？
オイルについてアイシャに聞いてみようとすると、なぜか嬉しそうだ。
「どうしたの？」
「これ、エクスシアオイルっていうのだけど、貴族の女性に人気のアイテムなのよ。塗ると潤いが出てきて、お肌がつるつるになるの。なかなか流通しないから、かなり高値で取引されているわ」
へえ、意外に高額アイテムなんだね。女性に人気アイテムということなら、アイシャとシルフィに使ってもらうのがいいだろう。今のところ、お金に困っているわけではないしね。
「じゃあ、それはアイシャとシルフィ用に取っておこうよ！」
そう言うと、遠慮がちに「いいの？」と聞いてくる。僕が頷くと、そっとオイルを手に取っ

て嬉しそうに収納袋に入れていた。うん、喜んでくれたなら、僕も嬉しいな。
「このケープはアイシャに装備してもらおうかな。ケープだから僕には合わないしね」
彼女の肩にそっとエクスシアケープをかけた。このケープは純白に金色の縁取りがしてあり、かなり高級そうなデザインだ。アイシャに似合っていて、よい感じだと思う。

ドロップ品も無事に入手したので、次の階層に移動する手段を探すために周りを見回してみると、先ほどまで存在していなかったはずの扉が出現していた。
「あの扉が次の階層へ続く小部屋に通じてるはずよ」
アイシャに促されて、そのまま扉を開けて中に入る。罠の類があるかとも一瞬思ったのだが、アイシャが言うには、ボスを倒したあとに出現する扉には罠はないらしい。これは冒険者ギルドでも確認できている情報なので、大丈夫とのことだった。１００％鵜呑みにはできないけど、どちらにせよ信じて開けるしかないんだよね。僕もアイシャも罠を解除できないし。
扉を開けて入った部屋の中には大きな石碑があった。これは転送石といって、一度触れておけばダンジョン内で触った石碑間を瞬間的に移動できるらしい。ダンジョンの入り口にもこれがあって、アイシャに触っておくように言われていた。
石碑の向こう側には、下へ向かう階段があった。

「よし、じゃあ地下1階に行こうか」
地下1階の主な魔物は、オーク系とゴブリン系だった。ちなみに、目的のトロールは地下2階に生息しているらしい。
「アイシャ、この階はホントに気を付けてね」
地上のオーク同様、ヤツらは他種族の女性を捕まえて陵辱することで、種として繁栄している。もちろんオーク同士でも交配するのだが、他種族の女性の方がより好みのようだ。
ここからは僕もスキルを出し惜しみすることなく、戦おうと思っている。アイシャに万が一のことがあったらいけないからね。
僕は左手に始まりの短剣を、右手にライトニングエッジをそれぞれ装備し、慎重に探索を開始した。アイシャも臨戦態勢で僕の後ろをついてくる。
そして、この階最初の魔物に遭遇した。

名前：パワー・オーク　ＬＶ：18　種族：魔族　性別：♂
【スキル】豪腕　ストレンクスライズ
【アビリティ】咆哮

名前：パワー・ゴブリン　ＬＶ：14　種族：魔族　性別：♂
【スキル】身体強化・小
【アビリティ】咆哮

地上の個体とあまり変わらないかな。これなら、なんとかなりそうだ。
スキルとアビリティを全部【カット】し、小石に貼り付けて収納袋に放り込む。さらに、【ペースト】でヤツらの足を地面に貼り付ける。次の瞬間、２体の魔物は盛大に顔面から転倒していく。
「今だ、アイシャ！」
かけ声と共に、アイシャは待ってましたと言わんばかりに弓を射る。彼女の射線を邪魔しないように、僕は【魔法・火】で攻撃を開始する。まさに不意打ちを受けたヤツらは、あっという間に死体へと姿を変えたのだった。
「……マイン君、何かしたでしょ」
いきなり転倒したらそう思うよね。
「うん、ちょっとね」

アイシャは頷きながら、僕に話しかける。
「OKよ。いきなりで対応できないと困るから、次からは教えてくれると嬉しいな」
それ以上、アイシャは何も言わなかった。僕のやることを全て肯定するかのように、まるでそれが当然のように……彼女は振るまう。本当にありがたい。

その後、何体かのオークやゴブリンと遭遇したが、不思議なことに上位種には全く出会わなかった。オークもゴブリンも狩り慣れているせいか、【ペースト】を併用することでほぼ作業のごとく簡単に狩り続けられる。
アイシャも最初のうちはかなり慎重に戦っていたが、今ではだいぶ余裕が出てきたようで、サクサクと倒している。鑑定したところ、レベルも28から29に上がっていた。1階のボスも含めてかなりたくさん倒しているからか、いいペースだと思う。
変わったスキルを持っている魔物は特におらず、ただひたすら小石にペーストしていく作業の繰り返しだった。
地下に降りてきて1時間ほど経過しただろうか。突然、オークとは別種の叫び声が聞こえてきた。
……間違いない。オーガだ。

オーガは、厄介なことに鬼が元になっているといわれている。鬼とは、本来鬼族に分類されており、僕たちヒュームやエルフ、獣人たちなど、だいたいの種族と好意的な関係を築いている。その鬼族の一部が瘴気を吸い込み、魔物化したのがオーガなのだ。

一説では、ダンジョンを作る時に暗躍した魔人たちが鬼族を捕えて、無理やりに瘴気を吸わせたとされている。

オーガは力が非常に強く、俊敏、頑丈と三拍子揃っている。持っているスキルは攻撃に特化しており、戦闘のスタイルとしては一撃必殺を得意としているらしい。オークの上位版という感じだね。

僕たちの前に現れたオーガを鑑定する。

名前：パワー・オーガ　ＬＶ：35　種族：魔族　性別：♂
【スキル】ロック・スラッシュ　豪腕・極
【アビリティ】なし

やはり、かなり強いな。……え？　オーガが右手を大きくスイングして、何かをこちらに向かって投げてきた！

「アイシャ、危ないっ‼」
僕はアイシャを抱きしめながら横方向へと倒れ込み、飛んできた物体を回避する。倒れ込んだ僕たちの頭上を高速で通過し、背後にあった岩壁に直撃する。大きな破壊音を周囲にまき散らして砕け散った。
飛んできたのは、おそらく巨大な岩の塊だと思う。さっきまでは、ヤツの手にあんな巨大な岩は存在しなかった。右手をスイングした時に出現したと思われる。たぶん【ロック・スラッシュ】というスキルなんだろう。調べる前に使ってくるとか……今のは本気で危なかったよ。
「アイシャ、あれは僕がやるよ。遠距離(アウトレンジ)で戦うには分が悪いと思う」
スキルはカットしたので、もう警戒する必要はないんだけどね。ヤツの腕力を考えると、その辺の落ちている岩を投げてくるだけでも十分に脅威だ。
アイシャが頷き、後ろに下がるのを目で確認したあと、右手にライトニングエッジを装備してオーガへと走っていく。僕を標的として認識したのだろう。先ほどと同じように、右手を大きくスイングし始める。
「残念だったね！　もうそいつは使えないよっ！」
僕は自己強化をかけながらオーガに向かって宣言すると、スキルが使えないことに気が付いたオーガがすさまじい咆哮を上げる。

猛烈な勢いで繰り出してくるオーガの拳をかいくぐり、ライトニングエッジを一閃。鋼鉄製の短剣もすさまじい切れ味だったけど、このライトニングエッジはさらにその上をいってるように感じる。

かなりの深手を与えたつもりだったけど、オーガはまだ生きていた。斬られた傷を気にする様子もなく、ブンブンと両腕を振り回して僕を捕まえようとする。オークなら致命傷となる攻撃のはずなのに……。恐るべき生命力だ。

生半可な攻撃では止めがさせないと判断し、僕は次の手段を実行する。そう、【武技：シャークグロウ】だっ！

大振りな腕を回避し、その懐に飛び込んで、必殺の一撃を見舞う。激しい炸裂音が辺り一面に響き渡り、オーガは遂にその場に倒れ伏した。

「ふぅ」

「マイン君、お疲れ様。怪我はしてない？」

アイシャが心配そうに走って近づいてくる。

「うん、平気だよ」

笑顔でそう返答し、オーガの亡骸を収納袋に放り込んだ。

「結構強かったよね」

僕がそう言うと、結構じゃなく、だいぶ強い魔物なんだけどねと彼女は苦笑する。

続けて地下1階のボス、コカ・グリースを倒した僕たちは、2つのドロップ品をゲットした。

名前：スピードシューズ　敏捷：＋12　階級：上級　属性：なし
特性：移動速度2％アップ

名前：シエルスーリエ　敏捷：＋25　階級：超級　属性：風
特性：移動速度3％アップ　空中歩行

2つとも靴で、一つは移動速度が上がるスピードシューズ。移動速度が上がるということは、【俊足】スキルがあるのと同じ感じなのかな？　スキルで能力を上げるのではなく、装備で能力を上げられるってことなんだね。

そしてもう一つは、たぶんレアドロップだと思うけど、スピードシューズの上位版なのかな？　えっ、空中歩行？　空中を歩けるってこと!?　……なんかすごいな、コレ。

取りあえず、２つとも収納しておこう。
転送石にきちんと触れておき、今回の目標であるトロールのいる地下２階へと移動した。
「なんとか目的の階に来ることができて、よかったよ」
この階は別に攻略する必要はない。あくまでも目標はトロールだ。
トロールは、とにかくデカイ。オークやオーガも大きいが、２〜３ｍ前後が一般的なサイズで、オーク・キングでも５ｍほどである。対してトロールは、小さい個体でもオーク・キングと同じくらいの大きさがある。
その半面、トロールの動きは非常に鈍重で、防御力もオークに比べると低い。にもかかわらず、オークよりも格上の魔物といわれるのには理由があった。
一つは、攻撃によってダメージを受けても、すぐに回復してしまう高い再生能力。もう一つが、顔面の１／３以上を占める大きな単眼から放出される強力な衝撃波だ。この２つの能力がトロール討伐の難度を引き上げている。
実際、中途半端な火力ではトロールを倒せない。長時間戦い続けた挙げ句、最終的に倒しきれずに全滅したパーティも数多く存在する。それ故、オークよりも格上の魔物と認識されている。なお、この階のボスはトロールの亜種らしい。さらに、まれにレアボスのトロール・ゲイザーが現れるというのだ。ただでさえ厄介なダメージ再生能力なのに、コイツの再生能力はさ

らに強力のようだ。
実際、このフロアを突破したパーティはほとんど存在していないが、突破した者たちは偶然遭遇した通常ボスを倒したケースで、トロールゲイザーを倒して突破できたパーティはほんのわずかしか存在しない。
僕たちは、周りの様子を慎重に観察しながら地下2階を進む。【気配察知・中】を使用しているので、不意打ちを受けることはまずない。
10分ほどフロアを徘徊し、遂に目的のトロールに遭遇することができた。

名前：パワー・トロール　ＬＶ：46　種族：魔族　性別：♂
【スキル】再生　衝撃の魔眼　豪腕・極
【アビリティ】なし

「えっ!?」
つい、叫んでしまった。衝撃って……魔眼って何さ!?
突然叫び声を上げた僕に、アイシャが怪訝な顔をする。
「マイン君、どうしたの？」

僕は慌てて首を振りながら、「何でもないよ」とごまかしておく。いや、何でもないわけないだろうと、心の中で自分自身に突っ込みを入れてしまった。

さて、噂の再生能力と【衝撃の魔眼】とやらを見せてもらおう。まず、スキルを奪う前にその力を目で見て確認してみる。再生というくらいだから、傷なんかは回復するんだろうけど、部位欠損ならどうなんだろう？　失った腕や足すら回復できるなら、オークよりも脅威というのも理解できる。

魔眼についても、どんな感じで発動するのか確認したい。もし眼から何か飛び出るようなスキルだとすれば、使用しているところを他人に見られるわけにはいかないからね。

「アイシャ、いくよっ！」

そう言ってトロールに突撃していくと、アイシャも弓を引き絞り攻撃を開始する。僕が取り付くよりも、先にアイシャの放った矢が連続してトロールへと命中した。

聞いていた通り、動きはかなり鈍い。これだけならオークやオーガの方が強敵といえる。だけどっ！　アイシャの攻撃で傷を負った部位が目に見えて回復していく。

なるほど……。確かに、すごい回復力だね。じゃあ、次は僕の攻撃を受けてみろっ！

右手にライトニングエッジを持ち、左手には始まりの短剣を持つ。左右から繰り出す連撃が、動きの遅いトロールに面白いように命中する。【双剣・極】以外のスキルを乗せていない攻撃

だが、レベル差が大きいため、相当のダメージを与えているはずだ。
これだけの攻撃が命中すれば、オークならとっくに倒せているはずだが、トロールはまだ持ちこたえている。さらにダメージを与えようと踏み込んだその時だ。何かが僕に命中し、吹き飛ばされた。それと同時に全身に激しい痛みが走る。
言葉にするなら、まさに〝衝撃〟。目に見えない力の塊だろうか。同じ目に見えない風魔法とは異質のもので、おそらくこれが【衝撃の魔眼】なのだろう。
「マイン君っ!!」
アイシャが僕に駆け寄り【魔法・回復大ＬＶ４】で回復してくれる。
「……痛たたたっ。ありがとう、アイシャ」
これはすごく厄介だね。全く予備動作なしに発動したように感じる。
「ねえ、アイシャ。今のアイツの攻撃見えた？」
「一瞬、目が光った気がしたけど……全く見えなかったわ」
僕の言いたいことが分かったのだろう。欲しかった答えがすぐに返ってきた。おそらく目が光るのが予備動作なのだろうけど、目に見えない攻撃だからはっきりと断定できない。
逆に、外から見ても何をしたか分からないということだ。僕が人前でこのスキルを使っても大丈夫そうだね。

「オークより厄介だね、アレ」
あれだけ斬りつけ、あと少しで倒せるところまで追い込んだはずなのに、今のわずかな時間でほぼ回復しているように見える。魔眼で弾き飛ばされてしまったので、部位欠損の確認まではできなかったけど、あれだけの勢いで回復するんだね。似たようなスキルで【補助魔法・徐々回復大（体力）ＬＶ２】があるけど、【再生】の方が効果は高いと思う。
よし、これでスキルのことはよく分かった。素早く【再生】と【衝撃の魔眼】をカットして、自分に貼り付ける。【豪腕・極】は、例によって小石に貼り付けて収納袋に放り込んだ。
いっぽう、トロールは全回復する前に【再生】がなくなってしまい、困惑しているようだ。よし、あとは一気に倒してしまおう！
【豪腕・極】【身体強化・大】【腕力強化・極】を重ねて攻撃力を上げる。さらに【王の威圧】を発動。するとトロールがガクガクと震え始め、全く身動きができなくなった。
僕は地面に落ちていた拳大の石を拾い、心臓があると思われる胸を目がけて全力で投げつける。スライムを小石で倒していた時の比ではない勢いで石は命中し、トロールは前のめりに倒れたのだった。
撃破したトロールを収納袋に放り込み、さらに地下２階を彷徨（さまよ）う。

その後、現れた6体のトロールを危なげなく倒した。オークやスライムのように、個体によってスキル構成が異なることを期待していたが、全て同じ構成で、新しいスキルの獲得はできなかった。

「ふう、この辺でもう大丈夫かな。そろそろいい時間だから帰ろうか？」

アイシャにそう言うと、少しだけ考えてから僕に提案してきた。

「マイン君、この階層のレアボス、トロールゲイザーって倒せると思う？　だいぶ進んじゃったし、ボス部屋の転送石で外に出た方が早いと思うわ。ただ、トロールゲイザーは冗談抜きに強敵だから、マイン君でも苦戦するかもしれないけど……」

トロールゲイザーが強敵といわれるのは、【再生】をさらに強力にしたスキルを持っているからだ。僕ならたぶん倒せると思う。攻撃についても、トゥワリングを使えば一気に殲滅(せんめつ)できると思うし。トロールとの戦いを見て、アイシャも判断したのかな？

「絶対とは言えないけど……たぶん倒せるんじゃないかな」

僕がそう言うと、アイシャも腹を括ったのか真顔で頷き、ボスへの挑戦が急遽決まった。

「流石にここには人がいないわね……」

ボス部屋へ続く広間でアイシャがポツリと呟く。ここに人がいないのは当然だと思う。

聞いた話では、トロールゲイザーを倒せた人たちはまだそんなに存在しない。よほどの大火力を持っていなければ、返り討ちにあうのは目に見えているのだから。本来なら大火力を揃えたうえで長期戦を覚悟する魔物だ。だけど、僕はすぐにスキルを奪い、トゥワリングで一気に沈めるつもりだ。

「よし、行こうか」

僕たちは扉を開けて、中へと足を踏み入れた。

名前：トロールゲイザー　ＬＶ：51　種族：魔族　性別：♂
【スキル】超再生　魅了の魔眼　豪腕・聖
【アビリティ】なし

これは……ひどい。スキルを奪わないで勝てるの？　これに勝ったパーティ、いやアライアンスかな、どちらにせよとんでもないな。

おっと感心してる場合じゃないね。いけない、いけない。まずはスキルを奪っておかないと。

「アイシャ、ファーストアタックは任せてもいいかな？　僕が合図したら全力で攻撃してくれる？」

アイシャが頷いたのを確認して、僕は【ペースト】でヤツの足を貼り付ける。攻撃を仕掛けるか、一定の距離まで近づかない限り、階層ボスはその場から動くことはない。

……これで、ヤツの初動は封じ込めた。あとは全力で自己強化だ。

【身体強化・大】【腕力強化・極】【脚力強化・小】【豪腕・極】【豪腕・聖】【ストレンクスライズ】、そして【リアライズ】からのトゥワリングを生成。

よし、準備は整ったぞ！

「アイシャ、お願い！」

僕のかけ声でアイシャが矢を射る。矢が命中し、動き出そうとしたトロールゲイザーは足を取られて大きくよろける。倒れないようにバランスを取っているようだが、もう遅いよっ！アイシャが矢を放った時点で全力でダッシュしていた僕は、既に射程内に到達している。

「くらえっ！【武技：シャークグロウ】‼」

災害級と呼ばれるオーク・キングをも葬りさった攻撃だ。【超再生】がなくなったコイツが耐えれるわけがない。

まさにオーク・キングが倒れた時の再現だった。激しい爆発音が周囲に響き渡り、トロールゲイザーは真っ二つに切り裂かれた。役目を終えたトゥワリングは、僕の手の中から光と共に消えていく。

そのままトロールゲイザーの亡骸を収納袋に放り込み、僕はそのままその場に座り込む。やはりトゥワリングを生成すると、相当消耗するみたいだ。

さて、ドロップ品は何だろう。

名前：ライナス・スワード　攻撃：＋60　階級：超級　属性：光　特攻：死霊
武技：サクリファイス・ツヴァイ

超級の片手剣だ。かなり高性能だね。専用の武技まで使えるみたいだ。

これはシルフィに渡すのがいいね。喜んでくれるといいのだけど。

「ふう、お疲れ様！」

若干あきれ顔のアイシャにそう話しかけると、彼女もお疲れ様と言ってくれた。アイシャの手を借りて立ち上がり、そのまま転送石へと向かう。

こうして、僕の初めてのダンジョン探索は終了したのだった。

ダンジョンから出ると、外はすっかり夜になっていた。中にいると、時間感覚が大きく狂うね。これはもう1泊していかないとルーカスには戻れないな……。

【固有魔法・時空】を使えば帰れないことはないけど、さすがにあれを見せるのはちょっと躊躇ってしまう。正直にいえば、アイシャだけには話してもいい気がする。けど、まだシルフィのこともあるので、決心がついていない。シルフィが帰ってきて、彼女をアイシャと同じくらいに信じることができたなら、その時は打ち明けようと思う。

ということで、今日の宿をとらないと。

「こんな時間だし、もう1泊して明日の朝一番で帰ろうか」

アイシャもやはりかなり疲れているのだろう。すぐに僕の意見に同意してくれた。

昨晩も泊まった銀の鈴亭に到着すると、女将さんが玄関を入ってすぐにいたので、声をかけてみた。

「こんばんは。1泊したいのですが部屋は空いていますか？」

すると、僕たちのことを覚えていたようで、僕に向かって「はい、お泊まりいただけますよ」と優しく答えてくれた。

前払いで宿泊代金を支払い、女将さんについていくと、昨日と同じ部屋に案内された。少しの間、椅子に座ってくつろいでから、すっかりとお気に入りになってしまったお風呂に一緒に入る。

まだ少し気恥ずかしさが残ってはいるが、だいぶ慣れてきたと思う。ちょうどよい湯加減に思わず声が出た。
「ふぅ～♪」
それを見ていたアイシャにくすくすと笑われてしまった。
「なんか長かったような、短かったような感じだね。僕、疲れちゃったよ」
「そうね、私も少し疲れちゃったかな。本格的に戦闘するのは久しぶりだったから……」
「ゆっくりとお風呂に浸かって、疲れをとろうね」
その後、お互いの身体を洗い合って、イチャイチャしながらお風呂を堪能したのだった。
お風呂から出た、その後？　もちろん一緒のベッドで寝ましたよ。それが何か？

Cut And Paste

カット&ペーストでこの世界を生きていく

2

咲夜
イラスト
PiNe

試し読みはここまで
続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら
http://books.tugikuru.jp/detail_cutpaste.html

ツギクルブックス